

氏 名（本 籍）	楊 莉 （中国）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博課第403号
学位授与年月日	平成21年 3 月24日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間文化研究科
論 文 題 目	敦煌書儀における言語表現の研究
論文審査委員	（委員長） 教授 松 尾 良 樹 教授 奥 村 悦 三 准教授 鈴 木 広 光 教授 坂 本 信 幸

## 論文内容の要旨

本論文は五章からなる。第一章は敦煌文献・敦煌書儀について概説し、研究目的、先行研究、研究方法について述べる。

第二章は、敦煌文献に「書儀」がどれ程残存しており、研究資料として用いようかを検討している。先行研究を参考にして、内容により区分して一覧表にまとめた。「朋友書儀」（友人間の社交の書儀）は13点、「吉凶書儀」（冠婚葬祭などに関わる書儀）は79点、「表状箋啓」（上記以外のさまざまな書儀）が41点、合計133点の書儀が、書儀名・編者・時代・所在（スタイン文書－イギリス、ペリオ文書－フランス）とともにデータが整理されている。

第三章「待遇表現」は書儀に反映されているさまざまな言語表現のうち、待遇表現に着目して分析を加えている。

前半は「相迎書」の分析である。「相迎書」は友人間の交際、とりわけ友人を宴席に招き迎える「招待状」とその招待に答える「答書」からなり、両者が一對を成すものが中心である。

その分析の結論は以下の通り。

- ① 自分の呼称、自分に関する事物には謙讓表現を用いる。
- ② 相手、相手に関する事物には尊敬表現を用いる。

①、②は最も顕著な語彙的な特徴である。例えば①の代表は「卑」字で、「卑抱」「卑情」「卑志」などと多くの語彙に用いられる。

①' 自分の動作には「伏」「仰」などの、下から上への方向性を有する動詞が用いられ、謙讓表現を表わす。

②' 相手の動作には「垂」「降」「流」などの、上から下への方向性を有する動詞が用いられ、尊敬表現を表わす。

後半は「婦人吉書儀」の分析である。「婦人吉書儀」は婦人が書き手となり、家族・親戚に充てる書簡を集めた書儀である。書き手自身を表わす呼称、受け手を表わす呼称を中心に検討し、以下の結論に達した。

- ① 書き手の婦人自身を表わす呼称は「新婦」「賤妾」といった謙讓表現を用いる。
- ② 相手を表わす表現は「郎」(夫)、「府君」(舅)、「大家」(姑)などの敬語表現を用いる。
- ③ 兄嫁への手紙では「次嫂」(「次」には数字が入る。何番めの嫂さん)、自己の表現では「次娘」(何番めの娘)といった表現が多用される。これは大家族制の中で、輩行が重視され、家族内の秩序となっていた表われである。
- ④ 兄を「大伯」(おじ)、兄嫁を「伯母」(おば)と呼称するなど、相手を一世代上の呼称で呼ぶことが行われる。結果として自分を一世代下げる待遇表現であろう。

第四章では、書儀に反映している言語表現のうち、「死」に関わる婉曲表現、「病氣」に関わる婉曲表現を検討した。

第二章で見た様に、冠婚葬祭に関わる「吉凶書儀」は79点もの資料が残されている。そのうちの「凶書儀」は家族の「死去の告知」と、それに対する「お悔やみ」から構成されている。そのどちらにも「死」の表現は、いろいろ形を変えて現われている。他の文献に一切見えない使い分けを示しているのは、P2622『新集吉凶書儀』『吊尊卑儀』である。その順序は「崩背／棄背／傾背／傾逝／殞逝／喪逝／夭逝／夭喪／去離懷抱」と示されている。このうち「崩背」はもとは皇帝・皇后の死を言う語の転用であり、特別の敬意を表わす。以下は「棄背」(百歳以下、八十歳以上)から「去離懷抱」(三歳以下)までは、死者の年齢による使い分けである。

この規定が実際の多くの書儀中で守られていることが、実例で確かめられている。

書儀中の「問疾書」は相手の病状を問う、見舞いの手紙である。当然ながら「病氣」を意味する語が多数、形を変えて表われる。大きく分けると以下の通りである。

- ① 動詞＋「疾」 「得疾」「積疾」「染疾」
- ② 「疾」＋同義語 「疾疹」
- ③ 形容詞＋「疾」 「微疾」「諸疾」「熱疾」
- ④ 乖(そむく) 「乖和」「乖忤」「乖宜」「乖適」
- ⑤ 違(たがう) 「違和」「違裕」

第五章では、三・四章の結論をまとめた。

# 論文審査の結果の要旨

本論文は五章からなる。

第一章は序論で、研究目的、先行研究、研究方法について述べた。20世紀初め、敦煌の莫高窟から発見された敦煌文書には、多くの佚書や世の中から姿を消してしまったと考えられる文献、世に知られなかった資料が多く含まれていた。本論文でとりあげる「書儀」もその一つである。

「書儀」研究の出発点となるのは趙和平『敦煌書儀研究』（十七篇の書儀の釈文・校記）、同『敦煌表状啓書儀輯校』（三十五篇の表・状・啓・書儀の釈文・校記）である。いずれも釈文・校記であり、必要に応じて上海古籍出版社の影印本を参照している。

第二章は、「書儀」という語の由来、敦煌文献中の「書儀」の定義を考察した。その上で敦煌文献中にはどれ程の「書儀」が残存しているか、先行研究を参考にしつつ、整理し一覧表にまとめた。

「朋友書儀」（友人間の社交の書儀）13点、「吉凶書儀」（冠婚葬祭などに関わる書儀）79点、それ以外の「表状箋啓」41点。

第三章では書儀に反映されているさまざまな言語表現のうち、待遇表現に着目して分析を加えた。まず友人間の交際、とりわけ友人を招待する際の書儀「相迎書」を分析した。その特徴は次の通り。

- ① 自分、及び自分に関する事物は謙讓表現を用いる。
- ② 相手、及び相手に関する事物は尊敬表現を用いる。
- ①、②は最も顕著な語彙的な特徴であるが、同様の表現は方向性を持つ動詞によっても示される。
- ①' 自分の動作には「伏」「仰」などの、下から上への方向性を有する動詞を用い、謙讓表現を表わす。
- ②' 相手の動作には「垂」「降」「流」などの、上から下への方向性を有する動詞を用い、尊敬表現を表わす。

次に婦人が書き手となって、家族・親戚に宛てる書儀「婦人吉書儀」を、とりわけ書き手自身を表わす呼称、受け手を表わす呼称について検討した。その結果は次の通り。

- ① 書き手自身を表わす呼称としては「新婦」「賤妾」といった謙讓表現が用いられる。
- ② 相手を表わす表現は「郎」「府君」「大家」などの尊敬表現が用いられる。
- ③ 大家族制を反映して兄嫁を表現するのに「次（何番めの）嫂」、娘を表現するのに「次（何番めの）娘」と輩行を踏まえた表現が多く用いられる。
- ④ 兄を「大伯」、兄嫁を「伯母」、弟嫁を「叔母」と称するなど、相手を一世代上の呼称で呼び、結果として自分を一世代下げる待遇表現が用いられている。

第四章では、書儀の反映する言語表現のうち、「死」に関わる婉曲表現、「病氣」に関わる婉曲表現を検討した。第二章で見た如く、冠婚葬祭に関係する「吉凶書儀」は79点もの多くの資料が残されている。そのうちの「凶書儀」は家族の死の告知とそれへのお悔やみから構成されている。告知にせよ、お悔やみにせよ、「死」の表現はいろいろと表現を変えて表われる。その使い分けはP262『新集吉凶書儀』『吊尊卑儀』に最も端的に示されている。その順序は

崩背／棄背／傾背／傾逝／殞逝／喪逝／夭逝／夭喪／去離懷抱

である。このうち、「崩背」は特別な敬意を表わすが、以下は「棄背」（百歳以下、八十歳以上）から「去離懷抱」（三歳以下）まで死者の年齢により区分されている。この規定が、実際の書儀中で守られていることを実例で確かめた。

書儀中の「問疾書」は相手の病状を問う「見舞いの手紙」であり、答書は「見舞いに感謝し、自分の病状を述べる」ものである。両方ともに「病氣」を意味する語が多数、形を変えて現われる。多くの形の異なる語彙が現われ、本章後半はそれらの語彙を構成する要素がどちらも「病氣」の意味を有することの説明が中心となっている。語構成から見れば、これらの二音節語の多くは「同義結合語」と規定しうるものである。

同様に前半部の「死」を表わす多くの表現も、殆どは「同義結合語」と規定しうる。「崩背・棄背・傾背・傾逝・殞逝・喪逝・夭逝・夭喪」いずれも「同義結合語」である。三歳以下の幼児の死を言う表現のみが例外で、「両親のふところを離れる」の意味の四字句となっている。

敦煌文書は難解である。写本には多くの俗字・異体字が用いられており、読解を妨げる。本論文は例として挙げた書儀の全文を口語訳し、状況を詳しく把握し説明することを自ら課したため、読解とそこに出てくる語彙の詳細すぎる説明に精力をさきすぎ、帰納が手薄になったのが惜しまれる。しかし、唐代の敦煌書儀を題材に、謙讓表現・尊敬表現・婉曲表現の確実な存在を証明した意義は大きい。中国語史の敬語研究に一定の寄与をしたと評価しうる。

よって、本学位論文は、奈良女子大学博士（文学）の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。